

CONTENTS

年頭に当たって2013年 2

「新生JIA」元年 地域会での活動と事業のより強化を 鳥居久保
 公益法人化と新会員制度へ第一歩 小田義彦
 住宅部会を立ち上げ、さらなる公益事業を 尾林孝雄
 みんなのJIA (from愛知)をめざして 鈴木利明
 会員以外の建築家や身近な人たちを喜ばせたい 長尾英樹
 3年間の集大成『三重の建築散歩』を発売 松本正博

第5回 大垣と水の文化
 奥の細道むすびの地 芭蕉が愛した町大垣 車戸慎夫 6

第2回 これからの都市計画とまちづくりを考える
 エコディストリクト：グリーンシティをつくる 村山顕人 8

第29回 JIA 東海支部建築設計競技「間」-風土を見る- 金賞受賞者の声 10
 西川博美・山崎 拓

静岡発 第3回建築ウォッチング「三養荘」と「江川邸」に酔いしれる 村松 篤 12

愛知発 住宅研究会勉強会 黒野有一郎氏「リージョンを持つこと」..... 森 信貴 13

愛知発 青年委員会 TALK&TALK 「家族について建築家と語ろう」... 西村和哉 14

JIA 支部長会議 in 沖縄 沖縄文化との邂逅 鳥居久保 15

会員のステージ
 オープンアーキテクチャー見学記 鈴木祥司 16

保存情報 第134回 常懐荘(旧竹内邸) 澤村喜久夫 17
 瀬戸の陶磁器問屋街 三輪邦夫 17

理事会レポート 鳥居久保 18

理事懇談会レポート 小田義彦 19

Bulletin Board 19

東海支部役員会報告 見寺昭彦 20

東海とっておきガイド⑤ 愛知編 宇佐見寛 21

地域会だより 21

新年広告 22

編集後記 清 峰芳・川合克己 24

◀ 伝統を味わう旅 10 石川 ▶

重要伝統的建造物群保存地区【金沢市東山ひがし】
 平成十三年十一月十四日、伝統的建造物群が意匠的に優秀な茶屋町として選定。文政三年(八二〇)、犀川西側の「にし」とともに「ひがし」の茶屋町として浅野川の東岸に街区が形成された茶屋町で、街路に面して二階に出格子を構え、二階の建ちを高くして二階に座敷を置く茶屋の形成を示す町家が連なっています。

町家の二階には幅二間で半間ほど奥まった入り口と、縦格子の入ったショーウィンドーのある比較的新しい店舗が入っていますが、町並みを壊すことなく観光客を導き入れ大変な賑わいです。金沢市役所に聞いたところ、店舗はここ数年で増えたこと。町家の利用・活用のためNPO法人金澤町家研究会という組織があり、それを母体として、金沢職人大学校・修復専攻科を修了し歴史的建造物修復士となった大工や設計士が所属する有限責任事業組合LLP金澤町家が、町家の改修・施工を行っています。ただ、一般にはまだ出入りの工務店などが改修の仕事をお願いするのが現状。また、金沢東山ひがしの町並みと文化を守る会が景観などの協議をしているとのことでした。



UIA千人茶会でお世話になった諸江屋さんで、茶会と同じ干菓子を購入。「にしの茶屋」まで足を伸ばしました。諸江屋さんによると、「ひがしの茶屋」よりも格は上とのことですが、人通りもなく閑散として「ひがしの茶屋」とは対照的でした。



塚本隆典
愛知地域会

「新生 JIA」元年 地域での活動と事業のより強化を

本部理事・東海支部長

鳥居 久保



会員の皆様、賛助会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。

昨年 11 月の衆議院解散そして総選挙では、民意が問われる場面が最後の最後にやってきました。原発政策の如何に揺れ、TPP 参加の是非を問い、消費税増税の賛否を募るなど、政治はさらにその混迷度を増し、この国の進路さえ定かでなくなった感を受けました。建築、都市、防災、エネルギーにおいても、もともとの立脚点やそれらを形づくってきた社会の構造基盤が改めて問われ、始めから考え直さなければならない 1 年だった、と言えます。

そうした中央の政治の動きに対し、一方で地域はどうあるべきでしょうか。まずは地域社会での商業活動や生産活動、文化活動などを基盤としたまちの姿に、人々が行き交う賑わいが加わり、人と人とのつながりに端を発して、活動や運動が盛り上がっていく…それが地域をとらえるうえで大切なイメージだと思います。つまりエリアマネジメントによってまちにかかわる人たち自身が推進体となることで、まちは動き、地域を変えていく、それが行政主導ではないまちづくりの持つ、民意や市民の合意による現実的な姿だと思います。

昨年の三重の伊賀市で開催された東海大会は、支部の会員約 100 名が集まり、まさにこの地域性をテーマに運営された大会でした。三重の JIA メンバーが伊賀の歴史や景観こそを地域の特性と位置づけ、どこにもない地域固有の財産について地元の文化人とともにまちや建築を通して議論し、ときには建築行政を厳しく批判し、地元の文化の健全さをこれからも守り抜いていこうと宣言するものでした。この強い姿勢と決意は、この大会を通じて一貫して見られたものであり、その上で地域を再構成していくという気概にあふれた、すがすがしく、力のこもった大会だったと思いました。

三重大会に見られる、このような地域の動きは建築家として常に携えていなければならない職能意識であり、発露であるべきだと思います。もちろん、単体の建築設計では従来どおりに質の高い社会資本を生み出すことが必要ですが、それ以上に建築・都市の専門家として、合議の結果得られたまちの方向性や示唆を、まちづくりのフィールドで実現させることが、求めら

れている建築家像だろうと思います。

こうした公益寄与的な立場には、JIA が来年度実現するであろう公益法人としての基本姿勢が凝縮されており、そのための組織づくりの最終段階を今、迎えているところです。すなわち、本部は単一会の頂点に位置するものとして、JIA 全体をガバナンスしていくことに専念し、同時に事務局機能を整理しつつ部分的に機能を支部に移管し、合理化の上で小さな本部を目指します。それに対して支部や地域会は今まで以上に地域の情報をもとに、地域での活動や事業を強化して建築文化を市民に浸透させ、社会から信頼される建築家として、認知されるよう努力します。このことは、近代に描かれた旧来の「建築家」とはパラダイムを離れた現代の建築家像（コミュニティアーキテクト）であり、これからの公益法人化した JIA と整合するものだと思います。

東海支部は、新生 JIA 元年を迎えるにあたって、「ARCHITECT」「卒業設計コンクール」「支部設計競技」に加えて、現在第 4 の支部事業である「東海建築賞」をスタートさせる準備に入っています。この建築賞は、中央経由の価値観で選ぶのではなく、東海の地域性に育まれた、風土や都市性、思想や建築技術などを、直接中央の価値観にぶつけたいと思っています。「卒業設計」「支部設計競技」とは違って初の実作のコンテストとして、大いに期待できるものですし、楽しい事業です。これから東海を象徴するような秀作が生まれるきっかけとなるよう、大切に育ててもらいたいと思います。

こうして JIA も創設から 25 年を超えて、新しい時代に入ってきた感があります。昨年の「建築家大会 2012 横浜」でも今後の課題や目指すべき道が大いに議論されていた通り、資格制度の将来性、会員増強という課題と新会員制度による組織の運営、復興支援へ社会的制度創設のための提言、そして国際化へのプロセスなど、まだまだやるべきことが数多くあります。今後の職能に裏打ちされた JIA 活動に向けて、市民にも会員にも開かれた支部運営に一層努力するつもりでおりますので、ご協力のほど、よろしく願いいたします。

本年もどうぞよろしく願いいたします。

(針谷建築事務所)

公益法人化と新会員制度へ第一歩

本部理事・副会長

小田 義彦



新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり皆様のご多幸とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。また、3.11で被災され、いまだに元の生活に戻れないでおられる方々に心よりお見舞い申し上げます。そして震災後より被災地に赴き、調査・相談・復興に取り組んでおられる皆様、本当にお疲れさまです。広範囲に及ぶ被災地の復興は、問題の多様さからかまだまだ緒に就いたばかりといえますが、JIA 東北支部はじめ、復興提案をされたり、地元の皆さんと一緒にまちづくりに参画されている皆さんには、頭の下がる思いです。

さて JIA は、一昨年秋の臨時総会と昨年春の通常総会で、公益社団法人にふさわしい定款改定と、それに基づく会員・会費規程の改定を行い、その後も支部集会などを開催して支部・地域会規程の整備をするなど、JIA およびその会員にとっての根幹を成す規程類を矢継ぎ早に整備してまいりました。4月からは公益法人としての第一歩を踏み出すこととなりますが、東海支部ならびに4地域会でもそれに即した規約類を、支部総務委員会が中心になって、急ぎ整備しています。また、新たな会員種別としての、準会員（専門会員・シニア会員・ジュニア会員・学生会員）と協会員（法人・個人）についても、入会資格および権利と義務について整備中です。私たち正会員以外の、建築設計周辺に関係する方、OBの方、正会員の資格に満たない実務者、学生、旧賛助会員、さらにはJIAの目的に賛同してくださる一般市民の方とも一緒になって活動していこうという主旨です。

公益目的事業は、「社会に対して少し開く」という意識を常に持って活動すれば、今までやってきたことを大きく方向転換する必要はありません。もちろん、公益目的以外の重要な事業もたくさんなされており、会員サービスという面も大事な部分であり、建築家資格制度の推進、設計環境改善活動や会員間交流、情報交換・発信などにも力を入れてまいります。

現在、正会員会費の約65%を本部関連経費として使っていますが、これを来年度で何とか60%まで減らし、残りをすべて支部へ配布することで支部事務局の基盤強化を図ってまいります。これは、公益法人移行に伴い、支部・地域会の役割がより重要になってきたからです。もともと日々の事業主体は支部と地域会にあると考えられてきましたが、今後ますます支部・地域会で

できることは本部から移譲していこうという流れに沿ったものであり、その分、支部のガバナンスが重要になると言えます。会計については、地域会分も含め支部でとりまとめて新々会計法に則り、四半期ごとに本部へ報告しなければならなくなりました。4地域会を含む支部全体の公益事業比率の管理も支部に委ねられ、事業計画を事前に理事会へ報告する義務が生じました。

現在の正会員会費は、本部会費+支部追加運営費（義務納付、東海支部は現在集めていない）+地域会費（任意納付、愛知は協会員会費）という3層構成の会費制度となっていますが、今年は何とかこれを解消したいと考えています。2013年度の本部から支部への交付金増（会費の40%を全国10支部へ分配）と新しい種別の会員（特に専門会員、ジュニア会員、学生会員、個人協会員。これらの会員の年会費は支部へ入る）の集まり方にもよりますが、いよいよ今年は支部追加運営費の徴収について議論を進める必要が生じ、今年1年は支部財政の今後を占う重要な年になります。また、公益法人化や新会員制度などいろいろな意味での試運転の年であり、「走りながら考え、微調整していく」のは、JIA全体の姿と言えます。

さて、日本建築士会の専攻建築士制度のうち「統括設計一級建築士」と「JIA登録建築家」との“統合”については、建築士会連合会三井所会長の「二級建築士・木造建築士を取り残して進めるわけにはいかない」との発言もあり、時間がかかるようですが、今後も注視していきたいと考えます。また、関東以北の自治体では国土交通省の意に反して「デザインビルド」と称して設計施工一貫方式のコンペやプロポーザルが散見され、これに対しても本部とも協力して意見・助言をしていかなければいけません。中部公共建築設計懇談会を中部地方整備局と共催して、より良い公共建築設計者選定方式について、発注者側へ意見を申し上げ、会員へ発注者側の最新情報をお伝えしていきます。

昨年の横浜大会のテーマは「共に超える」でした。今後ますます会員相互、そして社会との「絆」「ネットワーク」が我がJIAにも必要となってまいります。今年もまだまだ閉塞感を引きずっているようですが、私たち建築家が設計業務やまちづくりを通して、少しでも多く社会に貢献できる環境づくりをしてまいりたいと思います。今年もどうぞよろしくお祈りします。（伊藤建築設計事務所）

住宅部会を立ち上げ さらなる公益事業を

静岡地域会 会長

尾林 孝雄



あけましておめでとうございます。

昨年4月に会長を引き継ぎまして9カ月になりますが、会員の皆様の積極的なご協力に支えられ、中身の濃い数多くの事業を運営、実行することができました。感謝申し上げます。

建築ウォッチングは3回開催し、5カ所の建物の見学をしました。うち2カ所はJIA静岡の会員が設計・監理したものでした。JIA塾は2回開催しましたが、地盤に関することと国産木材をテーマに取り上げました。また、公益社団法人を目指す前の年ということで、地域会規則について検討を重ね、規則作成に着手すべく静岡地域会規則作成検討委員会を立ち上げ、10月に2回、11月に1回、計3回開催しました。

今年は新しく、公益社団法人日本建築家協会東海支部静岡地域会として再出発する年になります。静岡地域会も公益社団法人日本建築家協会の目的である公益保護と公益寄与に即した事業計画を立て、これを中心に運営することになります。静岡地域会は、今までも一般市民向けを念頭に置いた事業を積極的に行ってきたので、基本的には現行の事業を継承した上で、さらに事業の充実・拡大を図り、また行政への協力ならびに提言をも含め、今まで以上に幅広く展開していくことになると思います。中でも、建築ウォッチングは今までも好評で、毎回、会員以外の若手建築士や一般の方々の参加が4～5名はありました。これをさらに、一般の方が気楽に参加しやすいものにして、中心的公益事業の一つにしたいと考えています。

これまで静岡地域会には住宅部会がありませんでした。横浜でのJIA建築家大会がきっかけになりますが、住宅部会を立ち上げ、次年度の組織図に組み入れることを考えています。一般市民や社会に役立つ窓口としても、大いに期待される公益事業にしたいと思っています。

今年は公益社団法人として4月からスタートするわけですが、地域会としては、公益・収益事業の区分、書式の整備、スケジュールの組立などまだまだ課題は山積みで、これからの運営に当たって戸惑いは否めないところですが、引き継がれる課題としては会員増強、高齢化、役員が活動しやすい環境づくりなどがありますが、これらを乗り切りながら実りある楽しい会にしたいと思っていますので、会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(尾林建築構造設計事務所)

みんなのJIA (from 愛知)をめざして

愛知地域会 会長

鈴木 利明



新年明けましておめでとうございます。

5月の愛知地域会長就任以来早くも半年余り、旧年中の右往左往の日々を反省し、希望と充実の新年に漕ぎ出したい想いです。

就任時の本誌一文にも表しましたように、私は「地域会」がJIAの活動の先端(not 末端)であり、建築(～まち～環境)に対する私たちの職能発揮はまず「地域」に根差すことが根幹であると信じています。またその活動推進は、独りや数人だけが力んだり背負い込みすぎることなく、折々の場面の折々の同志仲間の強力なチームワークが肝心で、活気ある個々の「自然体」を寄せ集めて持続的に邁進したい所存でいます。

昨秋には東海支部の大イベントとして、「JIA東海大会2012 in 伊賀」が開催され、三重地域会の皆さま集結のご尽力により伊賀発の地域パワーに存分に浸らせていただきました。また、その1カ月後には全国大会が横浜で開催され、公益社団法人移行や建築家資格制度などの目下のJIAの重要課題が広く熱く語り合われました。

この間、愛知地域会としては特段の大イベントがない中で、各委員会・研究会を中心に地道に着実に日常的活動を展開してまいりました。私自身が先導的にかかわった高橋誠一・内田祥哉・池田武邦の3氏リレーによる建築講演会2012-先輩建築家シリーズでは、半世紀を超えて「建築」を先導されてこられた大先輩建築家の貴重なライブの場に、地域のベテラン・中堅建築家はもとより、建築家を目指す若手・学生の方々に多数ご参集いただきました。

本年は3年に1度の「あいちトリエンナーレ」が開催されますので、JIA愛知発の連動イベント企画を模索しています。

確かに現下のJIAは課題が山積しており、「公益社団法人」の今春認定に向け、支部・地域会でも新種別会員の組織化や会費・財政計画への独自の取り組みが必要です。職能集団としてより根源的な、「JIA登録建築家」魂～「建築基本法」の希求、「建築家」の立場の命題など大目標を視座に据えて、個々人から、地域会から発信したい意向もあります。

JIA愛知HPで表した通り、個々の構成員の主体性が結集して(地域)社会に開かれ敬愛される、身近でダイナミックな職能集団、でも平易に「みんなのJIA」(from 愛知)をめざしたいものです。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

(日本設計)

会員以外の建築家や 身近な人たちを喜ばせたい

岐阜地域会 会長

長尾 英樹



あけましておめでとうございます！

本年は、JIA として節目の年となります。公益社団法人化をして、しっかり組織が機能するために何をすべきか？が一番大切な初年度となります。

我々 JIA としてできることとして、私は公益社団法人化によりシステムの変更に右往左往するのではなく、「本当に地域に JIA が必要とされているのか？」という抜本的な問いにお応えできるよう組織の屋台骨づくりが必要だと考えます。もっと建築家はサービス業としての精神力を発揮し、どうしたら地域の方々に喜んでいただけるのか？を考えるべきだと思います。その一つとして、岐阜地域会は、岐阜の地域に根ざしたまちづくり事業に取り組んでまいりたいと思います。

また、好評を頂いている「JIA の窓」（岐阜地域で活躍する JIA 会員以外のメンバーとの交流の場）は継続的に、本年も 3 回は開催したいと思います。JIA 会員を増強するために、「JIA の窓」という場づくりは、会員以外の方々に我々の活動アピールができますし、仲間意識が生まれれば、自然に会員拡大に繋がるのではと考えます。

喜ばせたい地域の方々とは、JIA 会員以外の建築家と一般市民の方々の 2 種類に分けられると思います。東海支部の皆様もぜひ各地域会で、身近な人たちに喜ばれることを精一杯考えてみましょう！ 地域の方々の生の声に真摯に対応することにより、ほかならぬ我々 JIA 会員自身が成長し、地域に受け入れられて、人気が高まるという素晴らしいシナリオが待っています。それにより会員の仕事量も多くなり、JIA の活性化ができてと思います。私は JIA 全体というよりは、JIA 岐阜地域会として身近な岐阜の人たちのことを一番に考えようと思います。それが身の丈に合った活性化だと信じています。

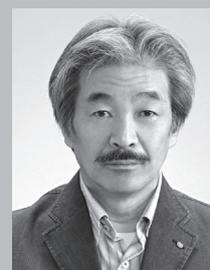
本年が、JIA 東海支部の皆様にとって素晴らしき良き年でありますことを心からご祈念申し上げます。

(Meet's 設計工房)

3 年間の集大成 『三重の建築散歩』を発刊

三重地域会 会長

松本 正博



早いもので、4月に三重地域会の会長に就任して9カ月が過ぎてしまいました。今年は、東海支部大会を三重で、それも私の地元である伊賀上野の地で引き受けたこともあり、あつという間の9カ月でした。その折は、大会参加者の皆さんには“伊賀上野”の地を満喫していただけたでしょうか？ 三重地域会員一同、一丸となってホストを務めさせていただきましたが、何かと不行き届きの点、多々あったと思います。そこは大らかなお心でもってお許しいただきたいと存じます。

さて、そんなこんなで地域会の事業を随分と犠牲にしてきた1年でしたが、今年度の事業として、三重地域会恒例の「建築文化講演会」、そして、3年間の継続事業としての集大成『三重の建築散歩』の発刊、パネル建築展があります。

ここで事業の紹介をさせていただきますと、まず「建築文化講演会」は、支部大会にも基調講演をお願いした栗生明氏を再度お招きし、「式年遷宮記念せんぐう館」など、三重県にもなじみの深い作品を中心に講演をいただく予定です。支部会員の皆様にも、ぜひともご来場いただきたいと存じます。

また、『三重の建築散歩』は、平成22年度から取り組んできた事業で、今年はいよいよその集大成として、冊子の発刊と、パネル建築展を計画しています。この事業は、三重県内にある優れた建築や、残すべき建築、そして評価の定まった文化財だけでなく、これから評価すべき建築などを、三重地域会の会員自らが取材し、建築家の立場で一般の人たちに、その魅力や意味を直接語りかける冊子として発刊するものです。一過性の建築とそうでない建築を見きわめ、分かりやすい文章と写真で紹介していますので、身近な建築の再発見や街並みへの関心を高める一助となれば幸いです。

なお、この事業には、それ相当の資金が必要です。三重地域会では3年間の積み立てを行い、何とか捻出しようと努力していますが、なかなか思うようにはなっていません。静岡、愛知、岐阜の皆さん、どうか冊子の購入という形での資金協力をお願いしたいと存じます。改めてお願いに参りますので、その節はどうかよろしくお祈り申し上げます。

新年早々、お願いばかりになってしまいましたが、お許しをいただきたいと存じます。

(上野建築研究所)

奥の細道むすびの地

芭蕉が愛した町大垣

車戸慎夫 | 車戸建築事務所

● 松尾芭蕉の紀行

大垣は、松尾芭蕉の紀行文学「奥の細道」の「むすびの地」です。芭蕉は「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也(中略)、予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」と、元禄2年(1689年)3月、江戸深川の芭蕉庵から奥羽の地へ旅立ちました。その矢立初めの句は「行く春や鳥啼魚の目は泪」です。その後、奥羽から北陸へ廻り、美濃までの旅を重ねて、大垣へ到着しています。

芭蕉が門人近藤如行の家へ入ると、「したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふるがごとく、且悦び且いたはる、旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて蛤のふたみに別れ行秋ぞ」と、伊勢へ旅立ってゆきます。

芭蕉は「奥の細道」の旅を「行く春や」で始め、「行く秋ぞ」で終わっています。「奥の細道」の旅を漂泊の旅と表現しているの、各地を彷徨い歩いたように思われますが、実際には、春に江戸を出発し、秋に大垣で旅を終えるべく、計画的な紀行を行って

ます。これは貞享元年の「野ざらし紀行」も同様です。芭蕉は貞享元年(1684年)8月、江戸を「野ざらしを心に風のしむ身哉」と詠んで出発し、大垣へ到着して、旧友谷木因と再会すると、「大垣に泊りける夜は、木因が家のあるじとす、武蔵野出でし時、野ざらしを心におもひて旅立ければ 死にもせぬ旅ねの果よあきのくれ」と、無事大垣へ到着できた安堵の思いを表しています。すなわち、「野ざらし」という、行き倒れを覚悟した旅であっても、当初から大垣で終えるつもりでいたのです。

● 芭蕉来垣の理由

大垣は芭蕉が何回も訪れることになる重要な地でした。芭蕉は野ざらし紀行の旅から約10年間に4度も大垣を来訪しています。

その理由は、まず大垣の地の美しい自然が挙げられます。『芭蕉と岐阜・大垣』で獅子門道統大野国士氏が記しているように、美濃は飛山濃水と称され、揖斐川をはじめとする多くの川が流れ、遠山を背後にして平野が広がっています。そして、水門川や杭瀬川が流れ、自噴水も湧き出す水の都で

す。水は人を寛がせ憩わせます。大垣と水との深い縁は、木因が杭瀬川翁・観水軒を別号とし、ほかに如水・大川・千川・大舟など、水にちなんだ号の俳人が多いことでも感じられます。揖斐川水系の豊かな水の風景が、芭蕉をこの地に引き寄せたと言えるでしょう。

第二に、大垣は東西交通の要衝にあり、旅に便利な土地でした。陸上は中山道や美濃路という整備された街道を通じ、水上は水門川の船町湊から水運によって各地へ旅することができました。芭蕉の美濃での足取りは、中山道・美濃路・北国街道・水門川・揖斐川に認められます。芭蕉は生地・伊賀上野、あるいは京・近江をたびたび訪れていますが、その都度、大垣を経由しています。

第三に、大垣には芭蕉の門人・知友が多くいました。谷木因や近藤如行ら大垣の知人たちは、蕉風を理解し共鳴する人々でした。この人々は36句の連句を成立させうる力量を持ち、芭蕉の心を安んじさせる俳人たちでもありました。なかでも大垣藩士は江戸詰の際、深川の芭蕉庵で直接芭蕉の指導を受けていたので、藩士たちは芭蕉の



「奥の細道 水の風景」 ①神橋(栃木・日光 大谷川) ②乙字ヶ滝(福島 阿武隈川) ③松島(宮城) ④水平な中山峠の分水嶺(山形) ⑤最上川(山形) ⑥親不知子不知(新潟)



来垣を待ち望んでいました。蕉門の藩士が芭蕉を大垣へ引き寄せたとも言えるでしょう。

第四に、俳諧師としての芭蕉は多くの門人を養成し、芭蕉が理想とする俳諧の世界の実現を目指すと共に、蕉門の発展をこの大垣の地でも図ったことでしょう。

4回もの大垣来訪は、招きたいという門人と訪れたいという芭蕉の気持ちが結びついて実現したものと思われます。

● 芭蕉と木因そして大垣藩士

芭蕉は来垣すると、前回記した船問屋を営む谷木因邸に泊まっています。木因は、800石の豊坂丸、700石の亀坂丸の持船を江戸往來の御用船とし、川船も15艘所有していました。芭蕉が奥の細道の旅を終えて、船町湊から水門川・揖斐川を桑名へ下ったのも谷家の持船でした。

この木因は俳諧や和歌に優れ、俳諧は京都の北村季吟の教えを受け、芭蕉とは同門でした。また、「好色一代男」「日本永代蔵」など浮世草子の執筆だけでなく、俳諧師としても著名な井原西鶴とも交際していました。芭蕉は天和2年(1682年)ころ、新しい試みとして、従来禁止されていた同字・同物の言葉を付句に用いようとしていました。そのため木因に対して手紙で、「蒜の籬に鶯をながめて 鶯のゐる花の賤屋とよみにけり」と、「鶯」を重ねて付句を書き送っています。

木因はこの芭蕉の新しい試みを理解し、機知に富んだ返書を認めて賛同したので、芭蕉は感嘆のあまり、大垣藩士中川濁子に

宛てて、「杭瀬川の翁こそ予が思ふ所にはがはず、鶯の評、感会奇二候」と称美の言葉を伝えていいます。杭瀬川の翁とは木因のことです。木因と芭蕉の往復書簡は「鶯の巻」として伝来し、「奥の細道むすびの地記念館」に飾られています。

元禄2年(1689年)9月、芭蕉は奥の細道の旅を終えると、大垣の俳人たちの見送りを受け、船町湊から舟に乗り、水門川から揖斐川を経て長島へと下ってゆきます。陸運(伊勢街道)は利用していません。水運は江戸時代の人々にとって身近で便利な交通手段でした。

木因たちは別離の情を抑えがたく、芭蕉・曾良・路通らを木因の舟に寄せ、「如行其外連衆(別の)舟に乗りて三里ばかりしたひ候」と、水上を芭蕉に同行しています。この船中で4人が詠んだ連句があります。

秋の暮行く先々の苦屋哉 木因
萩に寝ようか萩に寝ようか 芭蕉
玉虫の顔かくされぬ月更て 路通
柄杓ながらの水のうまさよ 曾良

芭蕉の旅の無事を願う木因、萩の下にでも宿って旅を続けようとする芭蕉、芭蕉との同行の旅を終えた安堵感からか、揖斐川の水を柄杓で飲んで味わう曾良の心境がよく示されています。江戸時代の人々は、川の水を飲料水としていました。大垣でも宝暦・天明年間に、初めて掘り抜き井戸が掘られるまでは、井戸水ではなく川の水が日常的に飲料水とされていました。揖斐川水系の水は清らかで、さぞ美味かったことでしょう。

また、江戸詰のとき中川濁子(知行700

石)、宮崎荊口(100石)、高岡斜嶺(200石)、など多くの大垣藩士は、江戸深川芭蕉庵で芭蕉をはじめ、多くの門人と交流しています。中川濁子は赤穂義士の大石内蔵助とも親交がありました。芭蕉は来垣すると、これら門人宅を順次訪問しましたが、次席家老戸田如水の「室」の下屋敷にも表敬訪問しています。如水は初代藩主戸田氏鉄の孫で、禄高1,300石、風雅を好み、芭蕉とも句を詠みあっています。

● 芭蕉ゆかりの地 大垣

芭蕉とかかわりの深い大垣は、昭和31年(1956年)、正覚寺の芭蕉木因遺跡と船町湊跡、昭和32年(1957年)に奥の細道むすびの地を市指定史跡としました。従来、「むすびの地」という言葉は用いられていませんでしたが、指定の機会に「むすびの地」を公称することで「芭蕉ゆかりの地」を顕現することになりました。

昨年4月8日、市制90周年を記念して、「大垣市奥の細道むすびの地」記念館(筆者設計)が船町の谷木因邸跡地にオープンしました。

※参考文献、写真の出典は、連載の最後に記載させていただきます。



くるまど・しずお | 1947年生まれ。
1974年名古屋大学工学部建築学科大学院博士課程修了。1983年より車庫建築事務所代表取締役社長。JIA岐阜会員。受賞歴:1980年大垣市立図書館(中部建築賞)、1987年揖斐川町歴史民俗資料館(日本建築学会100周年記念東海賞)、1995年西濃運輸(株)本社社屋(第1回岐阜県21世紀ふるさとづくり芸術賞優秀賞)、2001年中山道広重美術館(中部建築賞)

こ れ か ら の
都 市 計 画 と
ま ち づ く り を
考 え る ②

村山 顕人 一名古屋大学大学院環境学研究所 准教授

エコディストリクト…グリーンシティをつくる

米国オレゴン州ポートランドの都市づくり

米国での生活経験とワシントン大学に短期滞在していた指導教員の影響で、大学院時代から米国諸都市の都心部を対象とするプランニングの研究に従事してきました。オレゴン州ポートランドは、米国の中でも常に革新的な都市づくりを展開している都市の1つです。環境負荷の大きい自動車依存型の都市構造を反省して都市圏成長管理政策を導入し、都市周縁部の農地や自然環境を保全しながら、新しく整備した路面電車の駅を中心とする地区や都心部に密度の高い複合市街地を形成することに力を注いでいます¹⁾。最近では、2009年にポートランド市議会によって設立された非営利組織「ポートランド・サステナビリティ機構 (Portland Sustainability Institute、以下「PoSI」)」が、「We Build Green Cities.」というスローガンの下、地区 (district) スケールのハードおよびソフトのプロジェクトを通じて環境負荷の小さい都市をつくる「エコディストリクト」の取り組みを進めています²⁾。今回は、筆者が参加したEcoDistricts Summit 2012 (PoSI主催、10月23日～26日) の報告を兼ねて、この「エコディストリクト」を紹介します。

エコディストリクトの概要

持続可能な社会を構築するためには、地球温暖化、ヒートアイランド現象、エネルギー危機、人口変動、生物多様性低下といった多くの難しい課題に対応する必要があります。地球、流域圏、都市圏、自治体、地区、家といった異なる空間スケールにおいてさまざまな主体がこうした課題に取り組んでいますが、エコディストリクトは、このうちの地区スケールに焦点を絞り、住民、地権者、デイベロッパー、電力・ガス供給者、市役所などの協働の下、地区の持続可能性を加速させるハードおよびソフトの諸施策を展開しようとしています。地区は、改革を実現するのに十分な小ささと同時に、効果を発揮させるのに必要な大きさを持つと認識されています。

経済を成長させつつ、温室効果ガスの排出量を減らし、活気のある都市をつくる：持続可能性の達成に向けた改革に長年取り組んで来たポートランドは、その優位性を活かし、エコディストリクトの形成を新しい経済エンジンとして位置づけています。ポートランド市内に設定された5つのパイロット地区 (いずれも既成市街地) において、(1) 地区の組織化、(2) 地区の評価とプロジェクトの提案、(3) プロジェクトの実現可能性の評価、(4) プロジェクトの企画・開発・実施、(5) 地区のモニタリングという枠



上図 | エコディストリクトのイメージ (© ZGF Architects and Portland Sustainability Institute) 中 | 写真① 小さな都市空間の緑化 下 | 写真② 電気自動車のカーシェアリング

組みの下、エコディストリクトを形成します。プロジェクトには、建物やインフラストラクチャにかかわるハードウェアと人々や生活行動にかかわるソフトウェアがあります。具体的には、スマートグリッド、地域エネルギー・水管理、自転車の共同利用、雨水の貯留と活用、グリーンストリート、ゼロ廃棄物プログラム、コンポスト、廃棄物からのエネルギー創出、安全な通学路、植樹活動、交通需要マネジメント、自動車の共同利用、自転車専用レーン、歩道の改善、都市農業、パブリックアート、グリーンマップ、多様な公共交通手段などです。エコディストリクトのイメージについては図を、ポートランド市内に実際に整備されているハードウェアのプロジェクトの例については写真①～④をご覧ください。

PoSIは、エコディストリクトの形成に役立つこうした枠組みと後述する「ツールキット」をポートランド市内のパイロット地区に適用すると同時に、EcoDistricts Summitのような国際会議や研修を通じて同様の課題に取り組む他都

市にも普及させようとしています。

エコディストリクトの手法

エコディストリクトを多様な主体の協働で形成する手法は、ツールキット (EcoDistricts

Toolkit) として整理されています。キットには、ガバナンスモデル、パフォーマンス分野、プロジェクトパレット、パフォーマンスおよび実現可能性マトリックスの4つのツールが含まれます。

ガバナンスモデルとは、既成市街地の地区にかかわる多様な主体を組織化する際に母体となりうる統治構造の長所・短所を整理したものです。会社、非営利会社、協同会社、プロジェクト特定会社、既存の町内会、既存の住宅所有者組合、合同会社、建物所有者組合などの中から、それぞれの地区の状況に合った統治構造を選択することとなります。

パフォーマンス分野では、「エコディストリクト」が目指す目標と目的が整理されています。どの地区にも共通する目標として、開発の利益と負担を公正に配分すること、人々の健康とコミュニティの福祉を促進すること、物理的な環境とコミュニティの文化を通じて地区のアイデンティティを確立すること、環境に優しく適正価格の交通手段を提供すること、ネットゼロエネルギーを達成すること、水のマネジメントを通じて人間と自然のニーズを満たすこと、生息地や生態系機能の再生に資する健全な都市生態系を実現すること、最適な物質マネジメントを実現することが掲げられています。

プロジェクトパレットは、前述のパフォーマンス分野ごとに、建物やインフラストラクチャにかかわるハードウェアと人々や生活行動にかかわるソフトウェアのプロジェクトを包括的に整理した表です。そして、パフォーマンスおよび実現可能性マトリックスは、地区ごとに選定したプロジェクトの効果をパフォーマンス分野に照らし合わせながら評価し、また、プロジェクトの実現可能性を技術、資金、費用対効果、マネジメント、リーダーの肩入れ、利害関係者の理解・協力といった視点から評価した結果を整理する表です。

筆者が参加した研修プログラムには、以上の手法を仮想の地区に適用するグループ演習も含まれていました。枠組みとツールキットがあることによって、エコディストリクトの計画・実現の手掛かりがつかめたように思います。

日本の都市への示唆

2020年までに温室効果ガスの排出量を25%削減することを挑戦目標とする「低炭素都市なごや戦略実行計画」(名古屋市、2011年12月)は、環境技術の導入やまちづくりの工夫を複合的・総合的に取り入れる低炭素モデル地区を市内に2地区程度指定するとしています。また、長久手市のリニモの公園西駅の周辺では、環境配慮型まちづくり基本計画の策定が進んでいます。国でも「都市の低炭素化の促進に関する法律」が制定されました。このように日本でもエコディストリクト形成の機運が高まってきており、一般的な枠組みと手法を持つポートランドの取り組みは重要な示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

■参考

- 1) 村山顕人 (2008) 「米国におけるサステナブル・サイト・デザインを支える都市づくりの戦略」(東京大学cSUR-SSD研究会編著「世界のSSD100:都市持続再生のツボ」彰国社 pp.236-239)
- 2) Portland Sustainability Institute <<http://www.pdxinstitute.org>>



むらやま・あきと | 名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻・准教授(工学部環境土木・建築学科/減災連携研究センター兼務)。1977年生まれ。2004年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了、博士(工学)。東京大学国際都市再生研究センター特任研究員を経て、2006年10月から名古屋大学に在籍。専門は都市計画・まちづくり。2004年日本都市計画学会論文奨励賞受賞。共著に『世界のSSD100:都市持続再生のツボ』(彰国社)、『都市のデザインマネジメント:アメリカの都市を再編する新しい公共体』(学芸出版社)など



上 | 写真③ 建物・敷地に降った雨水を浸透させる施設
下 | 写真④ 雨水貯留・浸透機能を持つ公園

自分なりの問題意識からはじまること

学生の部 金賞 西川 博美 (日本工業大学)



●5年間の記憶

本作品の設計対象地は、私自身が5歳までの時間を過ごした場所でもある滋賀県の小さな町です。この町には湧き水が作りだす川が網目のように巡り、その川のとなりには人々の生活が築かれています。5年間の私の記憶はいつも川と家族とともに描かれていました。その記憶と新たなリサーチの両方を踏まえて、水と人々にまつわる住宅を提案します。

●「かばた」という水の風土

山の雪解け水が絶えず湧き出るこの町には、かばたと呼ばれる生活用水の循環システムがあります。人々はかばたの水で野菜を洗い、やかんを冷やし、食器を洗い、各家庭で飼われている鯉が残米処理をして、きれいになった水は再び人々に利用されます。

しかし現在では、山の積雪量の減少や、この町の住宅の建て替えとともにかばたの数は減少し、人々の利用の頻度やその重要性も少しずつなくなってきています。それは、私が幼い頃外で遊んで汚れた手をかばたの水で洗ったときの大切な記憶が消えてし

まうかのように少し淋しく思いました。本作品では、そんな自然や時間の流れとともに少しずつ変化する、水と人々の生活の「間」について考えたいと思います。

●水と人々の関係

現在のかばたと川ば「点」ど「線」の関係で描かれており、両者の間にそれ以上の関係はなく、いつしかこの町の水の風土は生活のほんの一点にしか存在しなくなりました。そこで今回は、川の「線」も生活を考える敷地の「面」も、「点」の集合体であることに着目して見ることにしました。かばたと川の「点」ど「線」を、無数の点が集まる「面」としてとらえ直すことで、今まで生活の一点にしか存在し得なかった水と人々の関係に、多様な変化をつくりだすことはできないかと考えました。

●水模様のつながり

大きさの異なる3本の川に囲まれた場所に川の流れをとり込んで、その流れの中で、水と人々の生活の「間」に多様な風景をつくりだします。敷地いっぱいにかばたの水と川の流れをとり込むことで、「点」ど「線」は姿を変えて水色の「面」となり、生活の随所に水

の風土とかかわる場面がうまれます。それは例えば、テーブルのすぐ向こうに鯉が泳いでいたり、川の流れによる水しぶきがガラス窓に水滴を描いたり、床板を少しずらすと豊かな水の波紋が現れたりするといった、水の模様がある生活空間となります。それらの空間は人々の営みひとつひとつのとなりで生まれ、連続したり、みえない壁となりながら水の模様に彩られた多様な風景を連続させます。この場所の川となり合わせの生活は、多くの自然と人々の関係を育みながら、やがて町全体へつながる風景となります。

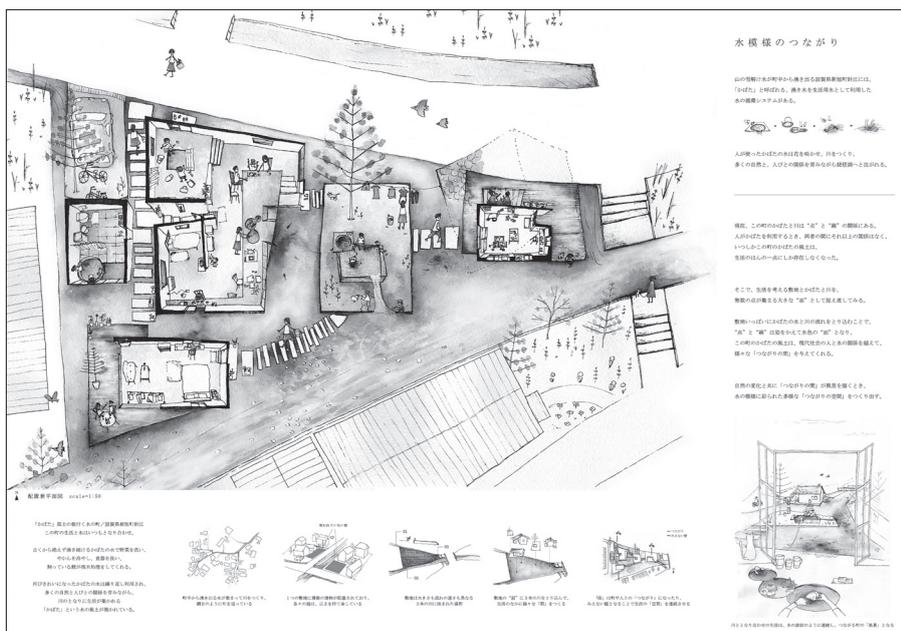
●おわりに

本作品を通して考えたことは、いつも考えている自分なりの問題意識に似ていると感じています。水は大地の傾斜やうねりといった地形との関係の下に流れを描き、その流れは私たちの手の届かない少し離れたところで起こっているように思います。また、人は地形と建築という計画された関係の下、私たちの操作の範囲内で流れが展開されています。

私たちが操作できる範囲は限られているかもしれない。けれど、人の流れや動きそのものは、もっと大胆かつ自由に私たちの計画していない範囲まで連続して展開してもいいのではないのでしょうか。

水の流れを大胆かつ自由に敷地にとり込んだように、人の流れも建築の枠からとび出して、もっと自由に、複雑になっていくと面白いと思います。そしてその流れやそれぞれの関係が建築の全体像を描き、更新していくように。私は今、そんな風景を創造しています。

今回のこの設計競技を通じて、たくさんの方々との出会い、たくさんの素敵な関係を築くことができました。本作品を評価して下さった審査員の先生方、そして関係者の方々に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



作品名「水模様のつながり」

建築と環境を問い続けたい

一般の部 金賞 山崎 拓 (滋賀県立大学大学院)



10月17日、突然の電話が鳴りました。「日本建築家協会東海支部の者ですが、このたびはおめでとうございます」。？ 前日、徹夜で作業をしており寝起きだった僕は何の電話か一瞬分からなかったのですが、よく聞いてみると、JIAコンペで金賞をとったとのこと。でも、僕の作品が金賞を頂けるわけがないと思っていたので、何かの間違いじゃないですか？と、もう1度確認のために電話を切ってもらい確認してもらいました。

数日後、ちゃんと合っていましたよと言われ、初めてのコンペ最優秀賞を頂きました。いまだに実感がわきませんが、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。審査員長である谷尻さん、審査員の方々、こんな賞を頂きまして本当に嬉しく思います。ありがとうございます。この賞におごることなく、金

賞を与えて良かったと思われるよう、これからも努めますので、よろしくお願いします。

●初めて考えるときのよう

初め、1600文字程度の文章を掲載させていただくので考えて下さい、と言われたのですが、僕自身、文章を考えるのは得意ではなく、他人の言葉ばかり使ってしまうのですが、コンペや作品の考え方などで大事にしている言葉を少しかだけ紹介したいと思います。これを読んだ方々にも、何か参考になれば幸いです。

「初めて考えるときのよう

考えるという行為をするときに、なんで？ じゃあそれはどうして？ と最初に戻ることになっています。例えば、〈コンペで勝ちたい→なんで？→賞を頂いて経歴になる→だから？→「新建築」などに掲載される→そして？→有名に(笑)→本当は？→見返したい人がいる。〉という感じで、本当の本当は見返したい人がいるんです。でも、もうこれが最初でしょうか？という

す。それについては一番シンプルで、誰もが思いつかないような当たり前を探すようにしています。審査員によって好みの作品は違うのですが、審査員にこれは一番良い、とか、これは一番ないな、とか思われる作品を目指しています。

「自分の考えを捨てる勇氣を持つ」

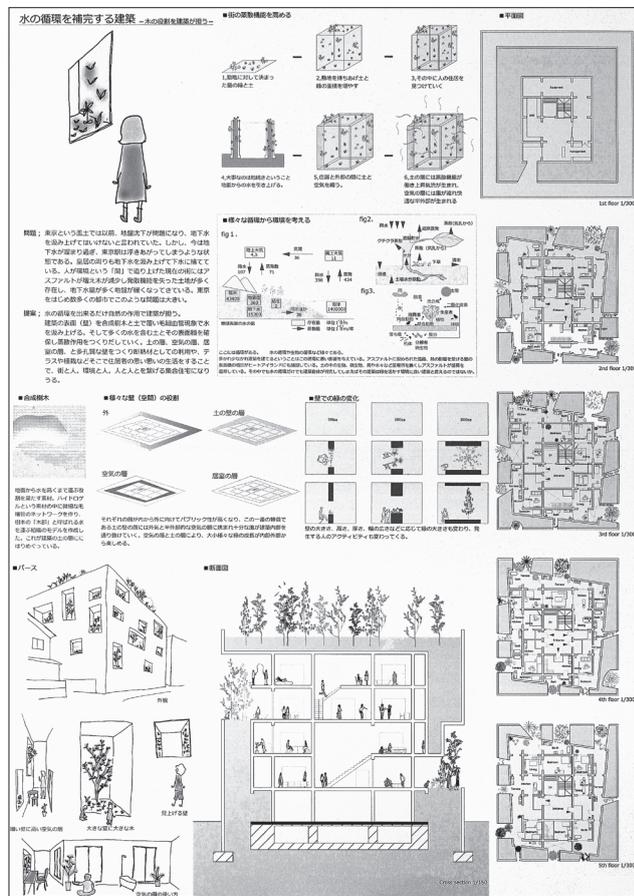
これは、一番難しいかもしれませんが、素直であれ、と同意義です。誰かの意見が自分の意見より良いと思えたら、そっちの意見を採用する。もしくは自分なりに解釈して真似る。まずは相手を認めることが大切ということ。そこから取捨選択します。

●日本の風土から考える建築とは

「環境」というキーワードは一言で表せないほど難しく魅力的です。同じくらい「建築」も解釈の持ちようが難しいですが、環境と建築が合わさったときの指標はまだまだ発展途中で、これからどんどん新しいモデル指標などが表れはじめるのだと思います。

いわゆる「スマートハウス」をはじめとする設備に過度に依存する省エネ快適住宅が話題を呼んでいます。これが今の環境の最前線だとすれば、そこに何か問いを持たせてあげるよう、環境と建築に対して考えを深めていこうと思います。本当の豊かさとはそこのか？

今回の受賞作品のアイデアも、建築を考えると環境というキーワードを入れると、「土」「水」「風」という言葉が浮かびました。最初の日本建築やそのほかのヴァナキュラー建築でも何だって、きっとそれらを上手く使っていたのに、現在の建築はそれらを引き離すようにつくられています。じゃあ、日本の現在の風土で考えられる建築は、人のつくってきた人工的な環境と自然界の環境とを近づける、間の役割なのじゃないか。これはそのような考えから生まれた作品です。



作品名「水の循環を補完する建築」

「コンペは一番になれ

よくも悪くも、一番になれ。コンペとは当たり前ですが、課題文がありま

「三養荘」と「江川邸」に酔いしれる

先日、恒例の紅葉狩りに京都へ出掛けました。今年は夏の猛暑と秋の冷え込みが緩いせいか、山の木々は何となく色付きがあまりよくない。緑や黄が入り混じる中に、焼け焦げたような赤が顔を覗かせる景色を横目に、久しぶりに私の好きな名建築へと足を運んでみた。

今でも鮮明に当時の記憶が思い出されるその建築は、京都・東山にある。ウェスティン都ホテル（旧：都ホテル）の7階からアクセスできる離れの和風別館「佳水園」だ。故村野藤吾の代表作として知られるこの建築を初めて目にしたのは、確か21歳の秋だったように思う。緩やかで軽やかな屋根が幾重にも折り重なり、中庭を取り囲んだ上品かつ美しい建築は、とても衝撃的だった。木造建築に携わる者にとっては、考えられないほど華奢なデザインであるにもかかわらず、隅々に至るまで理想のディテールが追求され、それらはひとつの作品として光り輝いていた。実はその建築の背景には、隠されたディテールと優秀な職人の力量が支えていたことを、のちに知ることになるのだが…。

今回の建築ウォッチングは、私が30年以上にわたって敬愛する村野氏の最晩年の建築「三養荘」と重要文化財の「江川邸」を訪ねるといことで、新旧の仕事仲間を誘って参加した。

11月8日（木）小春日和の下、総勢24名の

老若男女が合流し、バスに揺られること約2時間、伊豆長岡に到着した。42,000坪もの広大な敷地に建つ「三養荘」は、昭和4年に旧三菱財閥の創始者岩崎弥太郎氏の長男久彌氏の別邸として建設された後、数回にわたる増築・移築を経て、昭和22年に旅館「三養荘」として営業を始める。その後、昭和63年に村野氏設計の新館がオープン、平成5年に最後の新館が完成し、現在に至っている。

我々一行は、案内係の方に連れられ見学を始めたのだが、本館・新館・離れを含め3,100坪の規模は途方もなく大きく、1時間半の見学時間はあっという間に過ぎていった。結局、時間内で見学可能エリアを考えていただいたにもかかわらず、大幅に時間を延長することになり、関係者に変な迷惑をお掛けしてしまった。私を含め“建築馬鹿”といわれる集団は、とにかく建築が好きである。

地形を最大限に利用した配置計画、宿泊者のプライバシーに配慮した客室配置、木々の緑や池の水を巧みに取り込んだランドスケープ、インパクトのある円形ラウンジをアプローチ脇に据える手法などが、建築を引いて見たときの印象である。

一方、前出の「佳水園」同様、薄くて軽い屋根が重なり合うように連続したデザイン、すべての客室が違うデザインによってまとめられた豊富な引き出し、大工のみな



京都の「佳水園」 中庭から望む

らず左官・建具・表具をはじめとした職人の技量などが、寄って見たときの印象であった。90歳を過ぎてもこれだけのエネルギーを投入できる神業に、思わず感嘆の声を上げていたのは決して私だけではなからう。

興奮覚めやらぬうちに、次の見学先である葦山の「江川邸」に到着。1696年に建築された表門（三間一戸の薬医門）をくぐると、正面に大屋根が架けられた主屋が目飛び込んでくる。桁行き13間、梁間10間、高さ12mの架構は圧巻で、自然光によって映し出されたその姿は迫力があり、高山の民家を彷彿とさせる。また、江川氏が移住してきたときに生えていたケヤキを、そのまま柱として利用したとされる「生き柱」と、50坪の広さを持つ吹抜けの土間空間もかなりの存在感があり、往時の隆盛が偲ばれる。

今回見学した2つの建築は、時代・用途・規模においての違いはあるものの、柔と剛・明と暗・連と単のあり方について、改めて考えさせられる機会を与えてくれた。私にとって、今後の設計活動にエネルギーを注入してくれる建築ウォッチングに、これからも積極的に参加していきたいと思う。



村松 篤 | 村松篤設計事務所



「三養荘」 新館を望む



「三養荘」 玄関ロビー



「江川邸」 土間空間

黒野有一郎氏「リージョンを持つこと」

JIA 愛知地域会住宅研究会では、長期優良住宅やスマートハウス、エコ住宅など住環境が注目されている昨今において、風土に根ざし、環境共生を目指した設計を今年度の議題とした勉強会を行っている。それぞれの持つ知見を共有することによって、愛知の住宅建築の品質向上を図ることを目的としている。

11月17日（土）の勉強会では、武蔵野美術大学を卒業後、野沢正光建築工房を経て郷里である豊橋市に建築クロノを設立し、住宅・店舗などの設計の傍ら「豊橋駅前でのまちづくり活動」や「商店街でのアートイベント」など“まちなか”にかかわる幅広い活動をされている建築家、黒野有一郎氏をお招きし、「リージョンを持つこと（地域での設計手法）」という題目で、自身の経歴と作品の紹介から地域での建築の在り方に対する考えについてお話しいただいた。

●「環境」との出会い

「武蔵野美術大学時代、意匠の講義が数多くある中で、建築環境の講座に出会ったことが最初のきっかけだった。21歳のときに両親の関係でフランスへ1か月の交換留学へ行くこととなり、これが建築環境を考える上で追い風になった」と黒野氏は言う。そこでヨーロッパの気候、気象を体験したことで、日本特有の暑熱・湿潤と寒冷・乾燥に対する関心が加速し、環境建築に目覚めたようだ。

●野沢正光建築工房での10年

「学生時代の恩師の紹介で野沢正光建築工房の門を叩いた。野沢氏自邸である相模原の住宅を見学させてもらったときは、当時の実験住宅ではやられていなかった熱を考えた試みに心を奪われた」
「10年の勤務の中で、RC構造にOMソー

ラーシステムを組み合わせた世田谷区立宮坂学校や、木造にOMソーラーシステムを組み合わせた海部郡立田の住宅、いわむらかずお絵本の丘美術館、長池ネイチャーセンター、いわむらかずお絵本の丘美術館 アトリエなど、OMソーラーシステムを使った熱環境を考慮した案件に取り組むことができた」。

黒野氏の勤務した10年という期間は、野沢氏の50歳代での設計活動を共にできたということであり、今になって素晴らしい財産になっているという。

●パッシブデザイン

「OMソーラーに対して、敷居が高いと感じ、どう扱っていいかわからない設計者が数多くいると思う。OMソーラーシステムを冷たくなならない換気システムであると考えることが大切だ。OMソーラーシステムは断熱・気密性がないと体感できない。さらに、暖を取るという次元にまで到達しているとは言い切れない。よって、OMソーラーシステムは、空気で熱交換を行う安全で寒くならない換気システムであると考えて用いている」と黒野氏は言う。パッシブデザインについては、厳密な数字を意識しすぎず、寛容な心構えで環境と共に暮らしていくことが大切であると感じた。

元来の住宅には、高断熱の素材や高機能な暖房システムなどない中で、生活の補助としてストーブや扇風機などがあっ



勉強会の様子

たが、主としては暑ければ窓を開け、寒ければ窓を閉める。この所作が建築と人の関係であり、環境を楽しんで住むことなのだろうか。

●地域で設計すること

「郷里である豊橋に戻り、設計事務所を設立したのをきっかけに、豊橋というまちでの活動を日々考えて動いている。その一環として、住宅・店舗の設計の傍ら行っている“まちなか”での活動では、豊橋という風土、歴史を考え、まちの人たちにそれらを知ってもらおうと活動を続けている」と黒野氏。建築はただモノをつくることではなく、いかに風土や文化に向き合い、共生していくかであると感じた。

●生き残るデザイン

「生き残るデザインとは、“建築として保って続いていくこと”が大切なのではないか。ヴェンチュリー著『建築の多様性と対立性』でキーワードとして挙げている『difficult whole』を『難しい全体』と解釈している。『難しい全体』とは、建築をつくるために出てくる問題一つひとつに対して、どれだけ多くの脳が働かせるかではないか」と語った。

昨今の建築では技術が進み、素材の種類にも富んでいる。その中で意匠は、環境、構造、設備などさまざまなエキスパートたちと協力し、よりよい建築をつくっていくことが重要であると考えさせられた。また、協力しあい、オーケストラの指揮者のように意匠が建築の監理をするには、デザインだけではなく、構造や環境、風土や歴史にも精通していかなければいけないだろうと、この勉強会を通じて感じた。



森 信貴 | 笹野空間設計

「家族について建築家と語ろう」

青年委員会のTALK&TALKは11月25日(日)TOTO名古屋ショールームにて、パネリストに**高部修氏**、**久保田英之氏**、**濱田修氏**、**柳澤力氏**を迎え、従来の講演形式とは異なる、一般参加型の公開講座として行われました。

人類は定住生活するようになってから、住居(=建築)をつくり、集まって生活するようになり、そのなかで血縁関係に従い大家族、核家族と変化してきました。近代家族像の終焉ともいわれる現在は、同時に新たな家族像の萌芽であるとも思われます。建築を社会の構成要素としてとらえ、新たな「家族」を建築家はどうか考えるのか? 4名のパネリストより広範囲にわたり違った観点から「家族」のあり方を紹介していただき、そこから問題提起・收拾することが今回の目的です。

高部修氏からは「沢田マンション」「限界集落」「高島平再生プロジェクト」「加賀屋/カンガルーハウス」を題材に、家族が集まって暮らすさまざまな事例が紹介されました。これらの生活共同体も、大きくくりとして血縁を超えた集団としての新しい「家族」かもしれません。

久保田英之氏からは「幼少期の実家(田の字プラン)」「日雇い労働者やホームレスの生活にみる集団性」「漫画喫茶を家代わりにする若者」「メイド喫茶に求める疑似家族や疑似家庭」「完全独立単身世帯住宅の実例」が紹介されました。古き良き日本の「家族」の生活風景と、従来の「家族」から離れた「単独」の生活風景を再認識させられ、「家族」の必要性とはどこにあるのか考えさせられました。

濱田修氏からは「夫婦と子」の形態の実

例として自邸と付属マンションが紹介されました。付属マンションは、顔の見えない家族に対しての提案が一般解であるnLDKにマーケティング上誘導される現実はあるが、仕切りのないオープンな専用庭の繋がりによりコミュニティが生まれるよう誘導している。また自邸においても建築(空間+ツール)によりお互いの存在を意識し家族のつながりを感じられるようにしているとお話から、そんな誘導ができる「建築の役割」を再認識しました。

柳澤力氏は、「描くことができなくなった家族像を、ハウスメーカーのCM描写から読み解くと、どのような家族(単身世帯含む)にも当てはまるように巧妙につくられていることが読み取れる」と解析されました。つまり一般解となる特定の「家族」を対象としたnLDKではなく、物質的に「箱」を販売しているように思われました。nLDK化が古き良き日本の「家族」のあり方を変える一因ともなったとも考えられます。

時間の都合上できませんでしたが、この後参加者とともに、年代別に「単身の場合」と「家族を持った場合」を各自想定して、一般解とされるnLDKで成立するのかわ? という議論をするワークショップを予定していました。

現在の日本では「核家族」が60%近くを占めていますが、その内訳は「夫婦と子」の形態が約30%であり、これが25年前では約40%であったことを考えると、その減少の速さに驚かされます。また単身世帯は現在約30%ですが、2030年には40%に達すると推測されています。



会場の様子

人口が減っているのに世帯数が増えている。晩婚化ではなく未婚化が進んでいる。西暦3000年には日本の人口は限りなく0に近くなるともいわれています。

また家族生活の中心的舞台になっている家は、今や遠い過去のものになりつつある現実があります。家にいながらにして、家族は携帯電話やパソコンで外部の誰かと繋がり、そのネットワークに共存する様は、人とつながっているようで、「家族」内での孤立化の進行の表れだと考えられます。

世間一般に建っている住宅と、現代の多様な家族構成や生活スタイルとの間にはズレが生じています。このズレをきちんと認識して、「夫婦と子」世帯以外の7割の実情をきちんととらえ、適応可能な住空間を提案することに建築の役割があります。今回はその問題の気づきにしか過ぎませんが、この議論の展開がこれからの住宅のあり方を導き、またそこに近代家族がはらむ問題の解決の糸口があるようにも感じられます。

生産性を築くために適しているとされた近代家族(核家族)像が終わる。というより、生産性を上げるための戦略とモラルのない技術が先走り、近代家族(核家族)像を終わらせている。現在の社会に合わせた建築をつくるだけでなく、より良い社会になるよう誘導し、貢献できるような建築をつくるのも建築家の役割ではないかと痛感しました。



西村和哉 | h+de-sign/architect

沖縄文化との邂逅

本部理事・東海支部長 鳥居 久保



10月16日、支部長会議が那覇市の沖縄支部で開催され、参加した。14時より開催された会議では、各支部から活動報告がなされた。各支部長は理事会メンバーでもあり、毎月直接、あるいはWEB上で理事会案件に関する意見を交えているが、総じて厳密で、全体と細部との整合性を問い、妥協と矛盾を許さないスタンスである。しかし今回は支部長会議ということもあり、それぞれ自らの支部の長として、俯瞰的なものの見方に変わっていく。つまり、自らの支部でJIAとしての活動を少しでも活発化し、市民や社会との接点をどう持つべきかなど、課題や目的に向かう情熱と温かなまなざしとで抱負を語る。例えば東北支部は、復興支援はむしろこれからであり、さらに推進しなくてはならない決意を語り、会員増強に対しては、各支部がそれぞれの方針を打ち出す中、準会員の増強と正会員の維持という共有すべきテーマを確認し合った。また全国大会を控える関東甲信越からの参加要請や、次の開催の北海道支部からも協力依頼があった。

10月17日はエクスカッションであった。各支部長と沖縄支部のメンバー合わせて12人が台風21号の影響で時折強く吹き付ける風雨の中、名護市庁舎をバスで訪れた。那覇の北68km、車で1時間20分ほどのところ。名建築の呼び声が高い「名護」にこの年になってやっと会えるということで、かなりの期待感でこの日を迎えた。先に視察した2000年の沖縄サミット会場であった「万国津梁館」から向かう途中、バスが国道58号を走っているときに、名護市庁舎が目に入ってきた。

ルーバー屋根の乗ったバルコニーが建築の外周を覆い、沖縄の建築の特徴であり象徴であるブロックが多用されている。抜けのある花ブロックは建築の外装としてバルコニーの腰部分や垂れ壁部分に使われ、赤白のブロックをボーダー状に組み合わせた柱は、余白の空間にリズムとスケールを与えていた。ブーゲンビリアの太い幹がアサギテラスの柱に巻きつき、屋根へと伸びる様子は動物的ともいえる凄みのある形態を呈する。また、海の方角には56体のシーサーが守り神となって壁面に張り付く。一つひとつの構成が十分に建築的であるために、風土の感じさせ方に恣意性はなく、建築の根本から作り直してきたような確固たる力強さを秘める。建築雑誌で見てはいたが、建築の概念を拡張したかのような作りには、傘の骨を折りながらのコンディションの悪さも全く気にならず、感激した。

建築には近代以降、「つくり方」や「手法」



名護市庁舎



今帰仁村中央公民館

ができてしまっ、それが社会の建築の生産体制と結びついて、創作自体が変質した過去がある。建築が機能や動線、性能や量的指標の中で語られ、風土や生活への意識が希薄になる中、誰もが現代建築に問題意識を感じてはいたが、どう変えるべきかまでは至っていなかった。そんな時代(1979年)に、象設計集団はこの名護を建てた。

これは建築というよりは、ものが「存在するかたち」によって、見る人の感情を喚起するような、むしろ風景に近いものであって、建築の概念を超えている。象が近代をどうとらえ、どう超えたかを考えると、次はやはり、「今帰仁」を見ないで帰るわけにはいかない。この日は予定があったため、翌日この建築のルーツに会ってみようと思った。

翌18日、レンタカーを借りて、今帰仁村中央公民館に来た。名護市のさらに北15kmに位置する。276本の赤い柱で構成されたこの公民館は、名護に先立つ4年前、1975年の完成である。平屋の建築だけに、アイレベルで展開される建築的な広がり、象の真骨頂ともいえる外観を呈する。抜けがよく、大屋根によって作り出される日向と日陰のコントラストが、来る人を内部へといざなう。内部といっても、部屋はほとんどなく、屋根下を風が吹き抜ける。竣工当時、屋根を覆っていたブーゲンビリアはすでになく、コンクリートの屋根がむき出しになっている。しかしこれが、象の思考の原点であり、名護の原型であることに違いはない。

現代の建築は、社会との接合チャンネルがあまりに多すぎて、建築を構成する自由度がない。関連事項を整理し構成するのをもまた建築であるが、名護や今帰仁と比べると調整する対象が風土ではなく、体制や制度であり、質が違う。名護も今帰仁も沖縄の風土を考えることで、建築生産におけるプライオリティを変えることに成功したい例だと思う。そこには原点を見つめる設計者の確かな目と強い行動力があってからだろう。沖縄支部の島田支部長には、沖縄の風土と建築の強度を知りえた貴重な機会を提供いただいたことに、感謝しつつ、沖縄の全日程を終えた。



名護市庁舎の柱に巻きつくブーゲンビリア

オープンアーキテクチャー見学記 あいちトリエンナーレ2013・イベント

鈴木祥司 | アトリエ祥建築設計



11月3日、名古屋市で行われたあいちトリエンナーレ2013・イベントの「オープンアーキテクチャー」に参加した。見学には30名ほどの市民が参加し、多数の建築関係者もいたようだが一般の中高年の方も多く、社会見学に4人の学童連れの主婦や学識者も混じったさまざまな顔ぶれとなった。

朝9時半に、愛知県庁大津橋分室に集合。名古屋市立大学名誉教授・瀬口哲夫先生の案内のもと、同分室の建物解説を受けた。引き続き隣の(旧称)伊勢久商店の解説もあり、同じような時代に建設されているながら微妙なデザイン考証の違いが理解できた。

瀬口先生の気さくでユーモアを交えた解説はリラックスした雰囲気を作り出し、見学者を和らげてなごみある場となった。そんな中ふと気がつくと、あいちトリエンナーレ2013芸術監督の五十嵐太郎さんも解説に聞き入って、近代建築の有様を模索している様子であった。

その後少し時間があつたので、歴史的建造物が多く残る「文化のみち」界隈で急ぎ昼食をとり、二葉館(旧川上貞奴邸)でお茶のひとつを楽しみながら、街並みづくりの取り組みが見られるこの地域の風情を楽しんだ。

午後は、歴史と風情のある金城学院高等学校・栄光館での「歴史まちづくり講演会」へ。金城学院・長屋頼子教諭の司会のもと、瀬口先生と五十嵐太郎さんのトークが始まった。3人の語り方がそれぞれユニークで対比が楽しく、聴衆の皆さんもその雰囲気に飲み込まれたように聞き入っていた。



瀬口先生(中央)の話しに聞き入る参加者(瀬口先生の右手後ろに五十嵐太郎氏)

次に、名古屋市市政資料館(旧名古屋高等裁判所)の見学に入った。石造りや左官技術による擬石造りがすばらしく、見学者は荘厳な装飾に見入っていた。復元工事に携わった建築技師の解説もあり、テレビドラマや映画のロケなどによく使われている正面エントランスのスケール感ある階段付近ではしばし足が留まり、見学者はひとときを楽しんでいた。しばらくして外に出てみると、秋の陽光の中で、重厚なつくりのレンガの配色と、ほどよく配置された木々の緑との景観は風情があつて快く、見学会であることを忘れてしまうほどであった。

さらに、一般的に帝冠様式と言われている名古屋市役所本庁舎の見学では、普段見ることのない本会議場や屋上時計台に入った。歴史感のあるその中はまさに未体験ゾーンで、学童はじめ見学者は嬉々としていた。屋上もやはり普段では見られない角度からの役所建築群の景観ゾーンで、時のたつのを忘れそうであった。

よくばって夕暮れまで愛知県庁周りの代表的近代建築めぐりをし、充実とした1日となった。参加者はきっと快い疲れのもと、帰途に着いたことと思われる。

仕事に追われて過ごす日々の中、歴史景観の再認識と発見のできるこのツアーは休息と心の豊かさを与えてくれる研鑽の場となった。名古屋市内に限らず愛知県内には優れた歴史認識の地域と建物が数々あり、都市の魅力・豊かさはこの歴史性を基に築きあげられていくものである。ぜひこのイベントの長期継続をお願いしたい。



「文化のみち」二葉館(旧川上貞奴邸)



歴史まちづくり講演会



金城学院高等学校・栄光館前では学内イベントも行われていた



名古屋市市政資料館の趣きのある敷地は都市景観を豊かにしている



主屋玄関



広間(書院の間)



応接室(洋館)



■紹介者コメント

小牧市の久保山の南に位置する常懐荘は昭和8(1933)年、教育者竹内禪扣が晩年に建てた邸宅で、和館(主屋)と洋館からなる。

和館は中廊下形式で西側に玄関、広間(書院の間)、仏間、東側に内玄関、家族の居住に使用された和室や台所を設け、縁側南側と廊下北側に庭園を配置する。2階は和室と洋間に設えた寝室及び書庫を有し、階段ホールに続くバルコニーからは南の眺望が開ける。

応接室(洋館)は玄関左手にあり、主屋とは広い廊下を介して繋がる。室内はマントルピースや家具などが細部までデザインされ、

落ち着いた空間をつくり出している。

建物は禪扣の死去後も親族が住み続けたが、老朽化が進み4年ほど前には無人となった。現在はひ孫にあたる林ケイタ氏(映像作家、京都府在住)が所有され、維持再生委員会を設立、展覧会やイベントを開催し、維持再生へ向けて管理を続けている。

常懐荘は昭和初期の上流階級の住宅建築で、和洋折衷様式の特徴を備え、高度な建築技法と随所に丁寧な意匠を凝らし、創建当時の姿のまま残る貴重な建物である。また襖絵は山田秋衛(大和絵)、尾上柴舟(仮名文字)の作品が残る。さらに興味深いことは晩年まで

親交のあった坪内逍遙の別荘「双柿舎」をモデルにしたといわれ、「常懐荘」の名は坪内が命名、直筆の扁額が保存されている。

建築が世紀を超えて生き延びるには、保存しようとする人々の積極的な意思が不可欠である。常懐荘が地域の文化財として活用・保存され、その価値が発信されることを願う。

※竹内禪扣(たけうち ぜんこう)(1877～1935) 早稲田大学文学部文学科卒業。大正15(1926)年愛知高等女子工芸学校創設

所在地: 愛知県小牧市久保一色228

澤村喜久夫 |
伊藤建築設計事務所



陶磁器問屋街



旧山丈商店倉庫正面



旧丸越陶磁器店



■発掘者のコメント

名鉄瀬戸線(通称「瀬戸電」)の終着駅「尾張瀬戸」の北側。東西にまっすぐ伸びた道路の両側に木造2階建ての、いわゆる商家がところどころ建っているのが見える。古い地図では田・畑の記号になっていて、自然発生的というより計画的につくられた地域と思われる。

明治後期、瀬戸において陶磁器の大量生産が進み、原料などの輸送手段として、それまでの荷車・馬車などから鉄道への転換が声高に叫ばれるようになり、明治38(1905)年に瀬戸電が敷設される。そのため旅客の輸送というよりも、瀬戸窯業のための貨物輸送が主

たる目的であったようだ。

貨車輸送が始まると陶磁器問屋は駅周辺に集まるようになり、問屋街を形成するようになった。道路に面した表は普通の商家だが、裏に商品が山積みになされ、かつては尾張瀬戸駅のプラットホームと直接つながっていたほど密接な関係であったが、今はその面影はない。

旧山丈商店倉庫: 大正5(1916)年建設、木造3階建て、半切妻屋根、トラス小屋組、外壁下見板張り。間口5間、奥行8.5間の長方形プランである。

旧丸越陶磁器店主屋: 明治42(1909)年建設、

木造2階建て、切妻屋根、外壁漆喰壁。多治見の陶磁器店から暖簾分けのような形で店を構えて3代目。現在は娘さんがアトリエ・トレとして洋服のリメイク・販売の店舗として活用している。南入り玄関は、奥の部分は縁が張られているが、通り庭。左手はミセザシキ、奥は茶の間。ミセザシキの西側は上便所に通じる廊下、中庭を介して蔵を配する。2階は床の間付き2間続きの接客空間と典型的な商家である。

所在地: 瀬戸市陶本町3丁目地内
(尾張瀬戸駅の北側)

三輪邦夫 | RE 建築設計事務所



事務局改革と支部運営費配分を審議

東海支部長・理事 鳥居 久保



第206回理事会は、11月15日(木)13:30~18:30、会長以下、理事22名(2名欠席)、監事2名、事務局2名、オブザーバー2名(東雲アドバイザーズ)の参加で開催した。

【審議事項】

1. 入退会者承認:6名入会希望があり、承認された。会員数4,402名(11月15日現在)

2. 後援名義承認:3件の後援を承認。

3. 2012年度委員委嘱

① 国際委員会 委員長委嘱:佐野吉彦 委員長退任:赤堀忍

② 災害対策委員会 委員委嘱:笹栗達夫(北海道)慶佐次操(沖縄)
(委員会の各支部1人体制確立の方針より)

4. 事務局改革の件(西勝二郎総務委員会委員長)

① 本部と支部の運営経費配分見直しの件 「本部と支部の運営経費配分を現在の64.9%:10支部合計35.1%を、2013年度の予算案において本部60%:10支部合計40%とする」件について、審議され、承認された。この比率で2013年度の予算を配分すると、配分額は会員4,500名、会費収納率95%と仮定した場合、本部115,200千円、支部76,800千円となり、前年度に比べ、10支部合計の運営費が10,500千円増となる(このための原資は、本部固定費の削減、本部委員会の組織再編ならびに支部移管などとする)。

② 事務局体制構築の件 「①の配分比が承認されたとき、本部は固定費の継続的削減をし、支部は本部機能の委譲を受け事務局を強化する」件についても、審議され、承認された。

5. 定款の軽微な変更の件

(筒井信也専務理事・東雲アドバイザーズ)

公益法人化への本審査に当たり、内閣府の担当官に交代が生じて、改めて定款の内容などに対する指摘があった。新たに指摘された事項を修正してもJIAが公益法人として目指す姿と変わることはない、との判断から、総会決議ではなく、理事会承認で変更を処理したい旨の説明が芦原会長ならびに筒井専務理事からあった。

記載内容の修正 ①6条の(1)に正会員の資格要件である「5年以上の設計監理」を記載する。これは会員規程で記述のある資格要件においては、定款でも同じように記述すべき、との指摘があり、会員規程と同じ表現で具体的表現に修正。②9条の削除。資格権利の停止を定款の中で記述することは、会員の利益保護の観点からも法人法に抵触する恐れがあるため、この項目そのものを削除。③25条4項 専務理事、常務理事だけではなく、業務執行理事の中に支部長を含める。以上、審議の上、承認された。

6. 会員規程・会費規定の軽微な変更の件

(筒井信也専務理事・東雲アドバイザーズ)

修正の内容 ①会員規程第8条「休会」に関する規程、会費規

定第7条「正会員の休会」に関する規程について。定款で第9条を削除した理由と同様に、「休会中の権利の停止」にかかわる規定においては「正会員の議決権を行使する権利のすべてを奪うことはできない」という規定に抵触する恐れがあり、会員規程8条、会費規定7条、それぞれ全文を削除する。②会員規程第3条2項 正会員の推薦者において「役員被選挙権を持つ」という資格要件は役員被選挙権の定義自体がないため、削除するのが妥当との指摘があり、当該文言を削除。以上、審議の上、承認された。

7. 支部規程・地域会規程の軽微な変更の件

(小田義彦規程類制定特別委員会委員長)

支部規程の変更 ①条文中の「地域」は地域会の地域と混同することのないよう、「区域」という表現に統一。②第5条2項、3項の「休会」と(資格)「停止」に関する記述においては、会員の権利の停止に抵触する恐れがあるため、削除。定款だけでなく支部規程からも削除した。③第4条2項、事業計画と予算に大幅な変更がある場合は、あらかじめ理事会の承認が必要。④第7条2項、支部役員の役職名は支部規程で網羅する。第7条6項、支部長は理事のため、任期は支部規程で記述の必要なし。⑤審議中に支部総会に関しての記述で近畿支部から異議があった。それによると、第9条の4項では総会は正会員だけで構成されるとあるが、近畿支部では準会員を総会の構成員に含める可能性があることより、4項を削除し、6項に「構成」を加え、それぞれの支部により、総会の構成は別に定められることとなった。以上、審議の上、承認された。

地域会規程の変更 ①第5条1項、地域会の構成員はその地域に存住するか業務する正会員によって構成されるが、支部とは違って、必ずしも全ての正会員によっての構成とはならないため、「全ての」を削除。②第5条2項、3項の「休会」と(資格)「停止」に関する記述においては、会員の権利の停止に抵触する恐れがあるため、削除。定款だけでなく地域会規程からも削除の措置をとった。③第4条2項、事業計画と予算に大幅な変更がある場合は、あらかじめ理事会の承認が必要。④第7条2項、支部役員の役職名は地域会規程で網羅する。以上、審議の上、承認された。

【報告事項】

1. 「JIA 建築家大会2012横浜」の参加要請について

(上浪寛大会実行委員長)

会員特別増強委員会報告

(道家駿太郎会員増強特別委員会委員長)

3. 事業管理の方針について

(筒井信也専務理事・東雲アドバイザーズ)

4. 理事選挙スケジュールについて(事務局)

5. その他 2012年度会費納入状況について

建築家大会で活動方針などを懇談



本部理事・副会長 小田 義彦

理事懇談会は、JIA 建築家大会2012横浜に先立ち、11月29日午後から、23名の理事と2名の監事で開催した。時間は1時間半と限られているため審議は無し、芦原議長のもとテーマを絞って懇談した。

1.大会に合わせて開催するプレスリリースで配布する資料についての説明を芦原会長から行った。内容は、“建築家大会2012横浜テーマ「共に超える」開催について”と“JIAの今後の方針”である。“方針”では、「JIA新会員制度と建築家資格制度の展望」「地域に根差したJIA活動と復興支援への取組み」「建築会のグローバル化とJIAの国際戦略」の3つを紹介。「展望」では、新たに正会員の資格要件を改定し、UIA基準に見合う制度の確立と国家資格化に向け、建築士会と調整を重ねていく。「取組み」では、支部・地域会を主体とした地域に根差した社会貢献活動を展開するため、建築・まちづくり支援機構（仮称、日本版CABE）を立ち上げ、資金および専門家の人的支援がスムーズにできる仕組みをつくる。「国際戦略」では、世界140カ国140万人のUIAネットワーク、アジア18カ国のアルカシア地域間ネットワーク、アメリカ・タイ・韓国などとの友好協定締結による2国間ネットワークを使い、人材交流、情報交換を通じて、建築・まちづくり国際協調と事業進出を目指すとの方針をアピールする。

2.新会員制度における本部・支部・地域会の会員管理と会費納入方針について、筒井専務が一覧表を示し説明した。論点は、専門会員とシニア会員（準会員）の入会受付・審査・会費請求・会員管理を本部と支部のどちらが行うのがふさわしいか。正会員OBであるシ

ニア会員の活動が支部に限られるとの誤解を招く、会費種別を最小限にしたい、との総務委員会意見と、この1年間議論してきた通りすべての準会員の入会審査・会員情報管理・会費納入は支部にすべき、との支部長理事で意見が分かれ、次回理事会で議決する。

3.現況と今後の活動方針について、道家会員増強特別委員長から報告があった。今年度75名の減少で、例年の135名（約3%）減よりは下げ止まっているものの、さらなる工夫が必要である。入会案内パンフレットの充実、フレッシュマンセミナー開催や増強達成支部へのインセンティブ（入会金を支部へ戻すなど）やJIAの魅力の広報など会員サービスの拡充についての提案が紹介された。

4.全国地域会合同会議で配布する「公益事業認定ガイド」について、小田事業評価委員長が説明、意見交換した。基本的には「事業への参加機会が会員外にも開かれている」「受託事業の調査資料の公開と調査の丸投げ禁止」「表彰事業は選考基準の公開と専門家の関与、公平性の担保」が守られれば従来どおりの事業が可能。以前にコンサルとのヒアリングで、実際に現金授受がなくても支払われたものとして公益事業費支出に加算する「見なし使役」という考え方ができるとしていたが、その後の全国地域会合同会議の中で、東雲アドバイザーから「実際に支払われたものだけを計上できる」と訂正があった。

5.その他、JIAとタイ王立建築家協会ASAとで、国際的な活動を目指す若手建築家の支援についての覚書を、11月29日付で交わすことが報告された。

Bulletin Board

「世界劇場会議 国際フォーラム2013」開催 「明日の公共劇場を、デザインする ～みんなの広場～」

主催：「世界劇場会議国際フォーラム2013」実行委員会

JIA 東海支部後援のCPD認定プログラム。

- 開催日 2013年2月8日（金）、9日（土）
- 場所 愛知芸術文化センター12階 アートスペースA～H
- 内容 劇場、音楽堂等の活性化に関する法律の活用は可能か、英国の事例を参考に公共劇場のあり方について議論する。
セッションテーマ／「公共劇場を、デザインする」、「公立文化施設の建設手法－最新事例を通して」
特別展示／「最新ホール事例」（パネル展示）
- 講師 マギー・サクソン
（キーシアター・ピーターバラ経営監督）（英国）
シーナ・リグリー
（ウエストヨークシャー・プレイハウス経営総監督）（英国）

バーバラ・マシューズ
（イングランド芸術評議会演劇部門ディレクター）（英国）
田村孝子
（静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ）館長）
園山土筆（しいの実シアター アートディレクター）
衛 紀生（可児市文化創造センターaLa館長兼劇場総監督）
長谷川祥久（香山壽夫建築研究所）
平山文則（岡山理科大学教授） ほか

- 参加費 一般（論文報告集別途）3,000円
論文報告集1,000円
レセプション5,000円
- 事務局 「世界劇場会議国際フォーラム2013」事務局
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-14-12 グランビル2B
TEL / FAX : 052-232-2271
e-mail : fl3@itc-nagoya.com http://www.itc-nagoya.com/

東海支部役員会報告

10月27～28日に行われた伊賀での東海支部大会も成功のうちに終了し、11月下旬の現在、次は横浜全国大会ですが、登録者数は支部への動員要請の1/3程度と少なめ。動員への本部の真剣さが見えてきませんが、この「ARCHITECT」が発行になる頃には無事終了していることを祈るのみです。幹事としての当面の急務は、支部規約・地域会規則および関連する役員選出規約や内規などの年度内作成となります。支部総務委員長の指示により、一気に練り上げたいと考えています。

見寺昭彦 | 愛知地域会



日時：2012年11月16日(金)16:00～18:50

場所：昭和ビル5階 JIA 東海支部会議室

出席者：支部長、幹事11名、監査1名、オブザーバー7名

1. 支部長挨拶

2. 報告事項

(1) 本部報告

①第206回理事会(11/15)(鳥居)

【審議事項】 ※理事会レポート参照

【報告事項】

1. 建築家大会2012横浜：東海支部登録者数の報告。

2. 第2回会員増強特別委員会(11/15)

・支部独自のリーフレットを作成、全国組織のメリットを利用、新入会員へのガイダンス強化、などの報告。

3. 事業管理の方針

・公益目的事業比率計算の際に、固定費として家賃・人件費も含めて計算すること。

・会員などのボランティアも、人件費算定する。

・講習会その他は、公益法人として常に一般へ呼びかけをするよう注意、など説明。

会員の経費などの素案作成希望。当面は作業時間を記録する、などの質疑応答。

4. 理事選挙スケジュールについて 決定と報告。

②総務委員会(11/8)(服部)

・年度予算は理事会承認後とする。

・会長エレクト性の必要性有無。

・会員会費システム導入は会員・会費システム一括化により消費税分減額。

・一級建築士を持たないJIA会員と仕事を依頼した依頼者が係争中。文章にて回答。

支部総務委員会(11/14)の報告

・2013年度予算は例年通りのスケジュールで可。2013年度決算・2014年度予算からは2013年度内の理事会承認となる。

・定款・支部規程に記載ある事項は支部規約に記載しないこととした。

③広報委員会・全国支部広報委員長会議 第8回(11/13)(江川)

・東海支部大会、東海支部設計競技審査結果の報告をした。

・市民向けリーフレット8,000部印刷直後、総務委員会報告の無資格者問題が発覚。「建築家は一級建築士の有資格者であり…」の一文を削除して再印刷。

④CPD評議会(11/1)(塚本)

・プロバイダー申請はなし。プログラム申請は49件認定。うち21件は一部修正後認定。

・支部大会のCPD処理の依頼。

⑤建築家資格制度委員会 第115回(10/24)

・横浜大会 資格制度シンポジウムについて(植野)

会員数減少を踏まえて立て直しを認識。横浜大会で討議して今後進める。

⑥建築相談連絡会議(11/6)(三輪)

・アンケート調査協力のお礼。結果を踏まえて建築相談委員会の活動基準明文化を検討する。

・行政処分を受けた人の相談委員委嘱など、横浜大会にて討議予定。

(2) 支部報告

①「登録建築家特別講習会」事業報告(9/29)(鈴木祥司)

②第2回JIA東海支部建築家資格制度委員会(11/12)(鈴木祥司)

・本部議事録の報告と登録建築家特別講習会報告。

・横浜大会「建築家資格制度の目指すところ」への意見募集。地域会長からは送付。

③総務委員会(11/14)(服部)(本部報告にて報告)

(3) 各地域会からの報告(各地域会長)

静岡地域会：横浜大会「原発ゼロ」に、原発のある地域会としてパネラー依頼あり。派遣した。

議事

【審議事項】

①東海学生卒業設計コンクール2012決算案(吉川)

余剰金は来期記念事業費として支部事業費に上乘せすることで決算承認。

【協議事項】

①JIA東海住宅賞の計画と概要(吉元)

・事業計画書、概算予算書の説明。

審査員3名はほぼ確定。一次は公開で審査。現地審査後決定。作品集を制作予定。

・現地写真なども含めて二次審査の公開可能か検討。建築家と作品のどちらを受賞対象とするか明確に、などの質疑の後、予算も含め次回審議事項とする。

②東海学生卒業設計コンクール2013予算案(吉川)

来期、記念事業と作品集製作を準備中。今期の差額29万を加算し、次期支部事業費は40万とする。

③持ち出し支部役員会、新年広告協力について(水野)



四季折々の神社

「建築」編は一宮市の中心に位置し、私の事務所の側にもある真清田神社です。

繊維の街として有名ですが、もともとこの地域は、木曾川の灌漑用水による水田地帯として、清く澄んだ水によって水田を形成していたため、真清田(ますみだ)と名付けられたといわれています。

有形文化財に指定された本殿の美しさもさることながら、神社を包み込むように生い茂った樹木が四季折々の表情を見せてくれる様は、自然のおおらかさを肌で感じることでできる数少ない場となってきています。春には境内に生える桃の木に花が咲き、桃花祭が行われます。

本殿への目的だけではなく、境内の四季を感じながら散歩するのに



もとても気持ちの良い場所です。

真清田神社：
一宮市真清田1-2-1
TEL 0586-73-5196

うなぎ

「食」編は、真清田神社前にある「辰悦」さんです。

うなぎはもちろん、お米にもとてもこだわりをもっているため、全体のバランスが絶妙です。うなぎは、外は少し焦げ目がつきカリッと焼かれ、中はふわっとした焼き上がりです。あつあつのご飯の上に焼きたてのうなぎののどんぶりがおすすですが、ひつまぶしや長焼きもメニューにあります。意外とサイドメニューのうなぎの肝焼きも、とてもおいしくいただけます。

真清田神社へ立ち寄られた後にこのうなぎどんぶりを食べると、明日への鋭気を養われることは間違いのないと思います。



どんぶり(上)
2,400円です

「辰悦」：
愛知県一宮市真清田
1-1-15
水曜休
TEL 0586-73-3699

地域会だより

<静岡>

- 11/8 11月東部持ち出し役員会・建築ウォッチング・会員交流会
「江川邸」(韮山)、「三養荘」(村野藤吾)見学
(詳細はP12掲載)
- 11/20 第3回地域会規則作成検討委員会 15:00~17:00
- 12/6 12月定例運営役員会
- 12/13 第2回JIA塾
- 1/10 第3回JIA塾

<愛知>

- 11/2 役員会
- 11/9 南フランス海外建築研修報告会
- 11/13 愛知賛助会CPD見学会(コイズミライティング工場、西明寺など)
- 11/17~18 美術サロンスケッチ旅行(京都府美山町)
- 11/17 住宅研究会勉強会 建築クロノ 黒野有一郎氏
(詳細はP13掲載)
- 11/25 青年委員会「トーク&トーク 家族について語ろう」
(詳細はP14掲載)
- 12/3 建築8団体連絡会会議、総務委員会
- 12/5 愛知賛助会ゴルフコンペ
- 12/7 役員会
- 12/12 青年委員会「建築教室」

- 12/15 建築講演会2012-先輩建築家シリーズ
池田武邦氏「近代建築における文明と文化」
- 12/19 愛知まちなみ建築賞 表彰式

<岐阜>

- 11/22 「JIAの窓」 時間:18:30~21:00 場所:COA
内容:個人の作品の紹介し合い 担当:大瀧、山田(浩)
- 1/27 おもしろ講演会(公益事業として)
時間:10:00~12:00
場所:ハートフルスクエア大研修室(予定)
講師:未来工業 相談役 山田昭男氏
テーマ:「おもしろく楽しい考え方」
担当:大瀧、加藤(友)、山田(浩)

<三重>

- 10/12 第5回例会(支部大会について)
第9回支部大会実行委員会
- 10/17 第10回支部大会実行委員会(ヒルホテル サンピアにて)
- 11/9 建築関連三会 第1回協議会
- 12/7 第5回役員会(2013年度事業計画・予算について)
第6回例会(同上審議)
建材研修会 「建築写真とカメラ」 土面彰史氏 忘年会

新年あけましておめでとうございます 2013年

<p>(株) 石井建築事務所</p> <p>代表取締役会長 増澤信一郎 静岡県熱海市田原本町 3-1 熱海魚熊ビル 2階 TEL 0557-82-4171 FAX 0557-82-4174</p>	<p>尾林建築構造設計事務所</p> <p>代表 尾林孝雄 静岡県葵区瀬名 7-11-20 TEL 054-264-9752 FAX 054-264-8017</p>	<p>企業組合 針谷建築事務所</p> <p>理事長 高田雅司 所長 鳥居久保 静岡県駿河区小黒 3-6-9 TEL 054-281-1155 FAX 054-282-5502</p>
<p>アール・アンド・エス設計工房</p> <p>所長 谷村 茂 名古屋市千種区猫洞通 4-30 安田ビル 3F TEL 052-782-3452 FAX 052-782-9941</p>	<p>(株) I. P. U 建築計画</p> <p>代表取締役 関戸 隆久 名古屋市東区泉 1-21-35 TEL 052-955-3070 FAX 052-955-3071</p>	<p>(株) 石本建築事務所 名古屋支所</p> <p>執行役員支所長 植野 収 名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル TEL 052-263-1821 FAX 052-264-1990</p>
<p>(株) 伊藤建築設計事務所</p> <p>代表取締役会長 森口雅文 代表取締役社長 小田義彦 名古屋市中区丸の内 1-15-15 桜通ビル TEL 052-222-8611 FAX 052-222-1971</p>	<p>(株) 浦野設計</p> <p>代表取締役社長 浦野廣高 取締役会長 浦野三男 名古屋市中区西八筋町 90 TEL 052-503-1211 FAX 052-503-1212</p>	<p>久保田英之建築研究所</p> <p>久保田英之 名古屋市東区東大曾根町 29-11 共栄ビル 5C TEL 052-979-0755 FAX 052-979-0756</p>
<p>(株) 久米設計 名古屋支社</p> <p>支社長 鈴木 一光 名古屋市中村区名駅 3-22-8 大東海ビル TEL 052-586-3301 FAX 052-586-3370</p>	<p>(株) 黒川建築事務所</p> <p>代表取締役 黒川喜洋彦 名古屋市中区鶴舞 2-10-5 TEL 052-882-0281 FAX 052-871-1884</p>	<p>光崎敏正建築創作所</p> <p>光崎敏正 名古屋市千種区四ツ谷通 1-7 ビレッジ四ツ谷 2F TEL 052-781-5523 FAX 052-781-5524</p>
<p>(有)設計室ユウアンドアベトウ</p> <p>神谷 勇雄 名古屋市中区川名町 5-23 カーサU 1F TEL 052-762-0789 FAX 052-762-0679</p>	<p>(株) 地域計画建築研究所 名古屋事務所</p> <p>取締役中部担当 尾関利勝 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル TEL 052-202-1411 FAX 052-220-3760</p>	<p>(株) 中建設計</p> <p>代表取締役 石田 壽 名古屋市中区大須 4-16-16 TEL 052-262-7855 FAX 052-264-0950</p>
<p>中日設計 (株)</p> <p>代表取締役 清谷英広 名古屋市中区筒井 2-10-45 TEL 052-937-6711 FAX 052-937-6881</p>	<p>(株) 東畑建築事務所</p> <p>代表取締役社長 香西喜八郎 執行役員名古屋事務所長 西村 隆男 名古屋市中村区太閤 3-1-18 名古屋 K S ビル TEL 052-459-3621 FAX 052-459-3623</p>	<p>(株) 中建築設計事務所</p> <p>取締役会長 森川 礼 代表取締役所長 廣瀬高保 名古屋市中区新栄 1-27-27 TEL 052-262-4411 FAX 052-262-4414</p>
<p>(株) 錦建築設計</p> <p>代表取締役 栢本良三 名古屋市中区栄 2-1-12 ダイアパレス伏見 TEL 052-232-3911 FAX 052-232-3912</p>	<p>(株) 日建設計</p> <p>代表取締役社長 岡本 慶一 常務執行役員名古屋代表 小堀 徹 名古屋市中区栄 4-15-32 TEL 052-261-6131 FAX 052-261-6136</p>	<p>(株) 野口建築事務所</p> <p>代表取締役 野口 新 名古屋市中村区名駅南 2-10-22 ORE 名駅南ビル 2F TEL 052-551-7007 FAX 052-551-7009</p>
<p>(株) ヤスウラ設計</p> <p>代表取締役 水野豊秋 名古屋市中区新栄 2-35-6 TEL 052-241-7211 FAX 052-241-7333</p>	<p>(有) 裕建築計画</p> <p>代表取締役 浅井裕雄 名古屋市千種区東山元町 2-43 中部東山荘 101 TEL 052-788-7744 FAX 052-788-7761</p>	<p>(株) ワーク・キューブ</p> <p>桑原雅明 吉元 学 平野恵津泰 名古屋市中区福江 1-7-2 TEL 052-872-0632 FAX 052-872-0633</p>

新年あけましておめでとうございます 2013年

<p>(株) デザインボックス</p> <p>代表取締役 山田貴明 岐阜市日野南 9-1-10 TEL 058-240-7899 FAX 058-240-7866</p>	<p>(有) Meet's 設計工房</p> <p>代表取締役 長尾英樹 岐阜県各務原市那加前洞新町 2-114 TEL 058-371-7528 FAX 058-371-8658</p>	<p>(株) アーキ設計</p> <p>代表取締役 村山邦夫 津市八町 3-10-10 059-225-7020 059-225-5104</p>
<p>(株) 上野建築研究所</p> <p>代表取締役 松本正博 三重県伊賀市平野見能 330-22 TEL 0595-23-6272 FAX 0595-23-6273</p>	<p>清水設計事務所</p> <p>代表 清水一男 津市栄町 1-803 TEL 059-227-1854 FAX 059-227-2268</p>	<p>(株) 中村建築設計事務所</p> <p>代表取締役 中村 久 三重県員弁郡東員町北大社 1325-9 TEL 0594-76-2102 FAX 0594-76-8717</p>
<p>(株) 稲葉商店</p> <p>代表取締役社長 稲葉卓二 静岡市葵区長沼 971-1 TEL 054-261-9705 FAX 054-261-8955</p>	<p>(株) 野村商店</p> <p>代表取締役 野村玲三 静岡県伊東市萩 578-216 TEL 0557-44-6600 FAX 0557-44-6618</p>	<p>エスケー化研(株) 名古屋支店</p> <p>支店長 片岡秀人 名古屋市西区菊井 2-14-19 TEL 052-561-7712 FAX 052-561-7707</p>
<p>(有) 柏彌紙店</p> <p>代表取締役 尾関和成 名古屋市中区橋 1-4-6 TEL 052-331-8681 FAX 052-331-8891</p>	<p>サーマエンジニアリング(株)</p> <p>代表取締役 福田哲三 名古屋市中区丸の内 3-2-29 TEL 052-955-1455 FAX 052-971-1398</p>	<p>三協立山(株) 三協アルミ社 東海ビル建材支店</p> <p>支店長 山下勝彦 名古屋市中区栄 2-3-6 NBF 名古屋広小路ビル 8F TEL 052-265-8149 FAX 052-265-8196</p>
<p>(株) サンゲツ</p> <p>取締役社長 日比祐市 名古屋市中区幅下 1-4-1 TEL 052-564-3111 FAX 052-564-3191</p>	<p>三晃金属工業(株) 名古屋支店</p> <p>取締役支店長 大内力男 名古屋市中区古渡町 18-9 角久ビル TEL 052-323-8621 FAX 052-339-1266</p>	<p>ジャパンパイル(株) 中部支社</p> <p>執行役員 支社長 古川敏英 名古屋市中区新栄町 2-4 坂種栄ビル 16F TEL 052-746-9141 FAX 052-955-0672</p>
<p>シンコー(株)</p> <p>代表取締役社長 池田皖偉 名古屋市中川区供米田 2-1815 TEL 052-301-1811 FAX 052-304-0068</p>	<p>総合資格学院 名古屋校</p> <p>支店長 竹谷 繁 名古屋市中区錦 1-2-22 中部資格ビル 1F TEL 052-202-1751 FAX 052-202-1755</p>	<p>(株) タジマ 名古屋営業所</p> <p>所長 本庄屋良昭 名古屋市中区東片端町 23 東片端サンコービル 5F TEL 052-961-1968 FAX 052-961-1989</p>
<p>TOTO(株)</p> <p>執行役員 名古屋支社長 森村 望 名古屋市中区栄 2-3-1 TEL 052-201-0201 FAX 052-221-0460</p>	<p>日本オスモ(株) 中部営業所</p> <p>代表取締役社長 松下 秀 名古屋市千種区東山通 5-20-1 サン東山公園ウエスト 2D TEL 052-781-9001 FAX 052-781-9002</p>	<p>(株) ハイム</p> <p>代表取締役 伊藤喜一郎 名古屋市昭和区南山町 20-4 TEL 052-835-5116 052-835-5117</p>
<p>パナソニック(株) エコソリューションズ社</p> <p>名古屋照明 EC 所長 梶原浩史 名古屋市中村区名駅南 2-7-55 TEL 052-586-1061 FAX 052-581-7734</p>	<p>(株) トーエネック 岐阜支店</p> <p>執行役員支店長 濱崎賢治 岐阜市西部中島 3-10 TEL 058-272-3232 FAX 058-273-9603</p>	<p>富士変速機(株) パーキング事業部</p> <p>代表取締役社長 中島寿和 岐阜市中洲町 18 TEL 058-271-6597 FAX 058-271-6510</p>

セ ル コ (株)
本社浜松 静岡支店 掛川営業所 東京連絡所
代表取締役 西川昌宏
静岡県浜松市東区将監町 7-14
TEL 053-463-1341 (代) FAX 053-463-1366
http://www.e-selco.co.jp

新年あけましておめでとうございます 2013年

投稿
募集!

「ARCHITECT」では随時、会員の原稿を募集しております

「自作自演」・・・600字程度+顔写真、内容に関連した写真

「会員のステージ」・・・1400字程度と写真4～5枚

「東海とおきガイド」(おすすめ建築・食)・・・

建築、食、それぞれ300字程度と写真1枚ずつ

「ARCHITECT」編集部 建築ジャーナル 酒井

〒461-0001 名古屋市東区泉1-13-35 CSCHISAYA BLG.

TEL:052-971-7477 FAX:052-951-3130

Eメール:kj-hensyu@gold.ocn.ne.jp

編集後記

●暖冬かと思っていたらとんでもない、寒気が日本を覆い日本海側は大雪になってしまいました。皆様くれぐれもご自愛ください。

さて、過日、支部大会が芭蕉生誕の地、三重の伊賀上野で開かれましたが、終焉の地が大垣で、車戸会員の「水の文化と大垣」の連載を興味深く読ませていただいています。2005年に岐阜で開かれたJIA全国大会の折も、大垣のエクスカッションで輪中など水の文化が風土に息づいていることを実感したのが、昨日のこのようです。

支部の設計コンペ(課題「間-風土を見る-」)で金賞を受賞した西川さんも、水をテーマに、水模様のつながりを通して人の生活の「間」を住文化にまで高めようとしています。村山先生も連載の中で水のマネジメントについて触れていらっしゃいます。さらには12月号連載「[まち]と[かわ]と[くらし]」で河川の景観とくらしのかかわりについて大影先生も語られています。

水は人の生活に欠かせない文化を形成しています。ときどき忘れてしまう水とのかかわりを、いつも大切にしたいものです。

(清 峰芳)

●「静岡発」の話題に関連し、村野藤吾語録を引用したいと思います。

「私のやったことは日本的だとよくいわれますが、自分ではわかりません。自然にそれが出てくるというのか、私が関西に席をおいたということから出てきているのではないかと想像しています。またスパニッシュを勉強していたことも影響しているかもしれないですね。ああいう、面のなかに影を求めるといこと、光を反射するものとしてではなく、その影を求めるといことですね、そこから柔らかさといえますか、そういうようなものや、線の細さ、面の薄さとかいうようなこと、そういうものを日本的と感じられるのでしょうか、私自身とくに意識したことはありません。

「佳水園にしても私はあまり和風を意識しないでやっているのです。あの格子にしても^{たるき}種にしても、日本的というよりもむしろ

洋風だと私は思っています。あの場合は庇を薄く見せたかったため、種の間隔もずっと広くしているのです。昔からのものとはまったく違うはずですが、その場所、その環境、その機能に応じて表現を異にするだけであって、手法そのもの、ものの考えかたはやはり同じではないのですか。

(「新建築」6605) (川合克己)

ARCHITECT

第292号

発行日 2013.1.1 (毎月1回発行)

定 価 380円

発行責任者 鳥居久保

編集責任者 吉元 学

編 集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-13-35

CSC HISAYA BLD.

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail: shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/